

證明し得なんだ、次に細菌に關しても一度ならず二度迄も病原菌らしいものに遭遇したが諸種の方面から考究して見ると常に其結果否定と云ふ運命に終りて居る、要するに昨年までの研究では恙虫病の病原は全く不明である但しこれは予等の研究した成績のみに就て云ふので他の研究者の成績とは相一致せぬことを特に茲に御斷して置くのである。

講 話

● 猿の話 (承前)

理學士 田 中 茂 穂

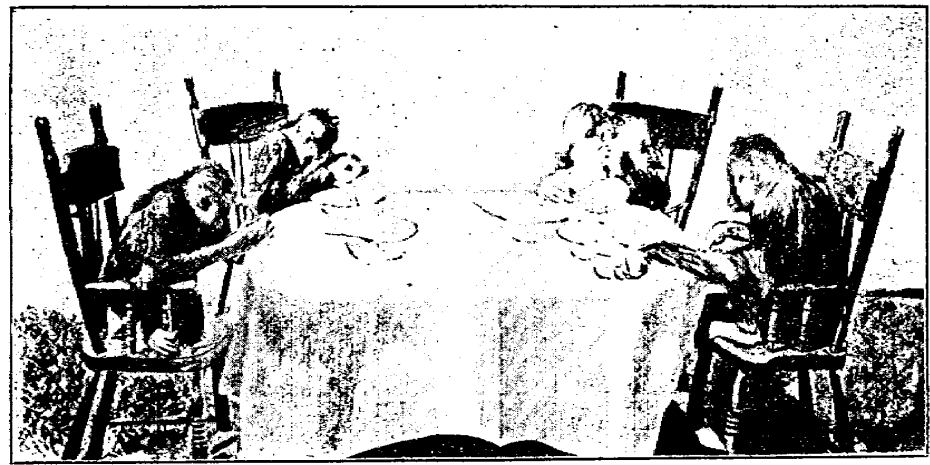
(明治四十一年六月十五日受領)

猩々は馬來半島の南に在るスマトラ島及ボルネオ島に産し、土人は是を「オラン、ウータン」と稱す、「森の人」の意なり、是れ上記の島の森林に生活するに依る、體長四尺五寸許にして、牝は牡よりも小なり、體肥大にして、腹部張出し、後肢短く、前肢頗る長く、是を垂るれば後

猿の話(田中)

肢の踝クルアンに達す、毛は暗紅色にして長く、老成せる牡には鬚を有す、眉丘は大猩猩に於けるが如く著しく突出せるにあらず、鼻頗る低く、兩顎強大にして前方に突出するを得、且上唇稍長し、其眼は意志を發表せんとするが如き相貌を現はし、耳は小にして極めて扁平なり、老成せる牡は頗る大にして、此部は廣き無毛部を爲せり、性兇暴なれども、大猩猩及黑猩猩に於けるが如く甚しからず、其幼者を取りて養へば能く人に馴れ、諸藝を覺へしむるを得べし、野生の情態にても研究するを得て、ブルック、ワレース、オルナデー、ベツカリ諸氏は是の猩猩を其の住める土地に就て研究し、其死せる者は多くの解剖學者是を研究したり、猩猩は平地よりも樹上に生活する事多く、平地に下るは水を得んが爲めなり、其の歩むや徐々にして頗る拙に、前肢の間に後肢を動かさ、前肢は恰も跛者の拐杖カセツエの如く用ふ、然れども樹上に在りては頗る巧に運動す、其歩行するは普通に一正にして、牝ならんには一正の子を伴れ、子は凡そ二才に達する迄母に伴ふ、十二才乃至十四才に達して初めて成長期に達す、

子は母の腰に跨りて堅く母を攫み、斯の如くにして母は



馴養せし猿一々堂内に會食す

臺を見るを得べし、土人の言ふ處によれば、猩々には敵なしと、然れども其の恐るゝ處は鰐魚と蟒蛇となり、鰐

其子を負ひて進
行す、黄昏に至
れば樹上に樹枝
を編みて粗末な
る棧敷狀の物を
作り、是に眠る、
是の寢臺は二三
分間にして竣工
し、地上凡そ四
間許りの處に在
り、斯の如き寢
臺は毎夜是を作
る者の如く、猩
々の仕處に行け
ば至る處是の寢

魚猩々を攻撃すれば、猩々は鰐魚に跨り、手を以て其兩
顎を持ち、是を引き裂きて殺るし、蟒蛇に攻撃せらるれ
ば、手を以て蟒蛇を捕へ是を噛み殺す、人を攻撃する事
殆ど無く、其人に敵抗するは人に苦められたる時なり、
有名なる探險家ワレーヌ氏の言ふ處によれば、氏は曾て
幼者を伴へる一疋の牝を見たりしが、是等の猿はゾリオ
と稱する樹上に在りて頗る怒つて其樹枝及有棘の果實を
數多地上に在る氏の頭上に投げ、終に是に近づくを得ざ
りしとぞ、是れ斯の如き獸類の極めて簡單なる飛道具を
用ふる初期の程度を示す者と云ふを得るが如し、猩々は
主として植物の葉及果實を食す。

西曆千八百八十年佛蘭西の一海軍士官は一疋の猩々を其本
國なる佛蘭西に送り、時の皇后ジョセフィンに獻せり、此
の猩々は數ヶ月は存し、當時の有名なる學者フレデリッ
ク、キュビエー氏は精細に是を研究せり、キュビエー氏
が實驗の内頗る面白き一例あり、左に是を略記せん。

「或時猩々を一集會室の隣に閉置したりしに、猩々は近隣
の賑はしきを聞き、自己の室の寂寥に堪へず、自己の室

の入口に在る戸を開かん事を勤めたり、然れども門高くして容易に是に達するを得ず、終に椅子を戸口に倚せ掛け、是に攀ちて戸を開き、終に隣室に入るを得たり」と
 猩々は其馴るゝや、人を好むのみならず、他の動物諸類を愛す、前に述べたるキュービエー氏の研究したる猩々は二疋の小猫を愛し、或は己の腋下に、或は其頭頂に置き、然れども小猫は地上に墮落せん事を恐れて、爪を以て猩々を引つ掻きたり、猩々は是れより生ずる苦痛を二三回忍びたりしが、終に小猫の足を検査して、其爪を除かん事を試みたり、然れども其爪を除く事を得ざるを知るや、爾後其の爲めに引つ掻かるゝを忍びて、常に小猫を愛したりとぞ。

馴養せる者に食物を與ふれば、手或は唇を以て食物を取り、食器を使用する事は餘り巧ならざるも、其智力と人より教へらるゝとにより、種々の事を覺ゆるに至る。

猩々は黒猩猩の如く幼なる者は柔順なるも、成長するに従がひ、其力量の程度を察するを得、漸次粗暴に流るゝに至る。

猿の話(田中)

類人猿中最も下等の位置にあるは猿^{テナガザル}なり、人或は是を類人猿中より分離す、是れ以上列記の類人猿に似ずして、腰部に脾膵あると、腦髓簡單にして遲鈍なるとによる、然れども其地上にありて直立して歩むや、上記の諸類よりも巧にして、手を頭上に挙げ、足蹠を充分に地上に付くるなり、然れども到底人類の如く巧に歩行するを得ざる者とす。

猿^{テナガザル}は名の示す如く、上肢頗る長く、直立するも上肢の尖端地に達す、最大なるはスマトラ島に産し、「シアマン」と稱す、體長三尺にして、黒色なり、喉袋を有し、是を膨まして他の動物を脅す事有り、其叫聲甚しきも、喉袋を有せざる猿の種類の發する聲に如かず。

猿の種類の種類は其他數種あり、皆東印度附近に在り、其重なる者を擧ぐれば、ヒマラヤ山麓に「フーロツク」あり、褐黒色を呈し、額上白色部あり、馬來半島に「ラル」あり、其顔面紅色にして、手は白色なり、瓜哇、ボルネオ、スル諸島には「ワウワウ」あり、灰褐色にして、眉白く、頭頂及指趾黒し、スマトラ島には「オンカ」あり。

猿の話(田中)

「オンカ」と「シアマン」とはスマトラ島の森林に有りて互に競争して其聲を發す、「シアマン」には老成せる一響導者ありて低調を以て叫べば、他の同類は高低種々の調子

テナガザル
猿の一種

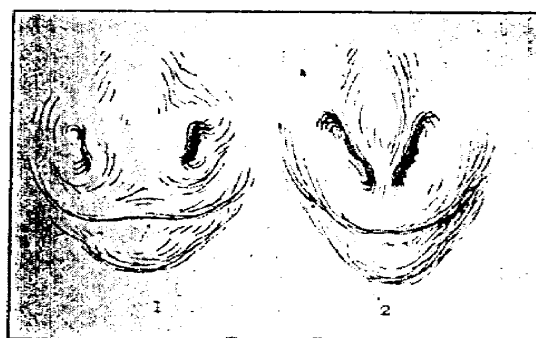


を以て是を和す、「オンカ」の聲は小兒の叫聲より強き事殆ど四倍にして、多くの獸類其聲に恐る。

猿猴は其性甚しく敏捷なるに非ざるも、其耳は極めて鋭

一二

し、樹上を渡るに頗る巧妙にして、一樹より他樹に渡るには、樹枝の尖端に進み、其撓むに及んで他枝に移る事有り、或は樹枝を動搖し、跳んで他枝に移る事有り、其跳ぶや時に十五間の遠きを跳ぶ事有り、性雜食にして、果實、葉、昆虫、蜘蛛、鳥卵等を食す、能く人に馴れ、老



狹鼻類と廣鼻類との鼻の合工を示す

成するも他の類人猿の如く
悍猛たるに至らず、諸藝を
教ゆるを得、茶、珈琲、チ
ョコレート等をも飲むに至
る。

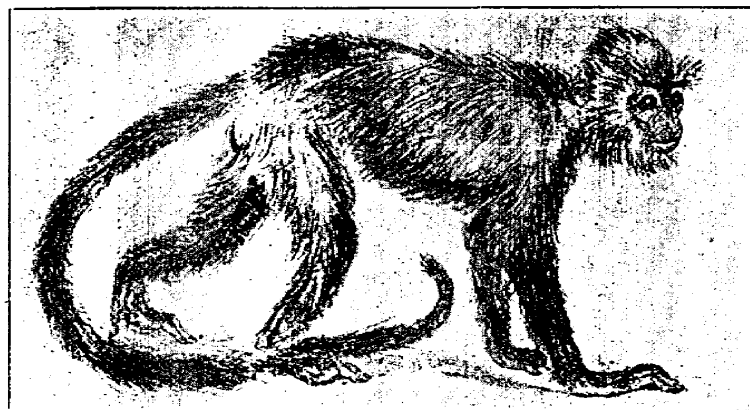
凡そ猿類を分つて狹鼻類と
廣鼻類と狐猿類とす、狹鼻
類は鼻孔の距離狭く、舊世
界のみに産し、廣鼻類は鼻
孔の距離廣くして新世界のみに産す、其他狹鼻類の種類
は廣鼻類よりも高等にして、狐猿類最も下等なり、前述
べたる類人猿は狹鼻類中最も高等なる者にして、其他に
も狹鼻類の種類多し、其重なる者を次に掲ぐべし。

無^{ニヒ}拇^{ナシ}猿^{ザル}は拇指全く無く、赤道附近の亞非利加に住み、凡そ十種有り、アビシニアにある者最も普通にして、其土語にて「グエルザ」と云ふ、體長一尺五寸乃至二尺五寸に達す、尾の長は、體長より長き事凡そ其十分の一にして、



無^{ニヒ}拇^{ナシ}猿^{ザル}の圖

り、或は其楯を裝飾す、是等の猿の樹頂に眠るや其尾を以て昆蟲の來るを防ぎ、其眠る處は蘇苔類の懸垂する處にして、是の中に入れば全く周圍の色と同化し、本來頗る著しき色を有せるに拘らず、爲めに全く見るべからざるに至る。



「ラングール」の猿の圖

「ラングール」と稱するは植物の葉を食する類にして、其種類凡そ三十種有り、皆印度附近に産す其内最も有名

尾端は總狀を爲せり、其毛皮の美なるが爲め土人及歐洲人は是を貴び、正に絶滅に近づくかとせり、或種類は黒色に或は白色及黒色に或は栗色に、或は是等諸色の混合なり、土人は是等猿の毛皮を以て自己を飾り以て戰場に上

猿の話(田中)

なるはハヌマンと稱する者にして、ヒンヅー人の尊崇する處なり、そは是等土人中に傳はれる「ラマ」なる神を助けたる者なりと考へらるゝによる、西洋人は是を「エンテ

ルス」猿と云ふ、ヒンヅー氏は決して是等の猿に害を加へず故に其跋扈甚しく、毫も恐るゝ處無くして村里に入り來り、庭園果園を荒掠し、店頭に置ける食品を盗む、外國人は是を害すれば土人は喜ぶも決して自ら手を下して是等の猿を害する事無し、「ラングール」の諸類はカシ



天狗猿の圖

ユミール
の降
雪多き
高地よ
りボル
子オ島
に達す
從來ブ
ランフ

オード、ジェルドン、ホーズ、ワレース、ブリス、スインホー、オルナデー、ホープス諸氏によりて研究せられたり、或は黒色にして美しき者有り、或は白色なるあり、或は栗色を呈する有り、或は黄色なる有り。

天狗猿と稱するは頗る特異の鼻を有し、其鼻の長さ事人の鼻に超えたり、其直立するや體凡そ四尺有り、頗る犖猛にして、馴養するを得ず、ボル子オ島に産し、數多群を爲して河邊の附近に住めり、殆ど常に樹上に生活し、地上に下る事稀なり、ボル子オの土人は是を「カハウ」と稱し、是を以て課税を拒みて森林中に避けたる人なりとして大に是を尊崇す。

尾長猿は又「グエノン」とも稱す、長き尾を有し、是を體上に擧ぐ、凡そ三十種有り森林中に群を爲して生活し、頗る巧に樹間に跳躍す、必ず番兵を置きて敵の來るを伺ひ、若し敵の近づぐを知らば警戒の聲を發し、皆樹上高く攀ちて敵を防禦するの準備を爲す、次で果實樹林を攻撃者に投じ、攻撃者は樹上高く留まれる群に攻撃を爲すを得ずして退却す、象の如き者も尙是等の猿を攻撃する事を止めて退却す、是等の猿を攻撃する者只二者有り其一は人類にして弓或は火器を以て攻撃す、他の一つは蛇類にして暗黒なる際に樹上に攀ちて是等の猿を捕ふるなり、其食とする處は種々にして、主として樹根、樹葉及

び果實を食す、其他鳥卵、昆蟲、貝類を食し、殊に蜜を好む者なり、其田園を刼掠するや單に飢餓の爲めのみならず、性來奪掠を好むによる者にして、其奪掠の慘憺たる到底想像するを得ざるなり、「グエノン」は歐洲の氣候にも堪ゆるを以て、從來諸動物園に養はれ、其性質等も亦大に研究せられたり、是等の猿は凡そ二種に大別するを得て、其一種は稍や長き吻を有し、尾稍や短く性獍猛なり、是を馴養するには、其恐るべき犬齒を鋸にて除くなり、是れが爲めに其猿は自己の力の除かれたるを自覺し温和となるに至る、他の一群は前群よりも温和にして、瘠形にして、吻短く、尾長し、人之を馴養す、是等の猿類は二群共に其性質を見るに、悲喜交も至り、殆ど源因なくして快活より憂鬱に轉じ、愉快より憤怒に轉す、其牝は子を愛する事甚しく、生れたる嬰兒は母猿是を其胸に置き手を以て是を抱きて哺乳す、漸く長するに及べば親ら母猿に結着し、母は恰も脊上に重き物を有せざる者の如く、極めて活潑に樹上を攀ぢ跳躍す、其牝は子を養はんとするの心無く、母子兩者を虐待す、故に動物園に

猿の話(田中)

馴養せる者にありては其母子を牝に遠けて養ふ、毛色頗る美し、是に屬する内に「タラポイン」、綠色尾長猿、白鼻尾長猿、白唇尾長猿、「モナ」、「ベルベツト」、「グリベツト」、頬鬚尾長猿、「パタ」、チアナ尾長猿、「ニスナ」等有り、皆亞非利加に産す、「ニスナ」は古代埃及人の知れる所にして、其圖は埃及人の墳墓及オベリスクに彫刻せられたり。

獼猴は又「マカック」と云ふ、印度及支那に在り、日本にも其一種を産す。

「マンガベ」を稱するは亞非利加の内地に在り、巴里の有名なる植物園にて夫のキユビエー氏の研究によれば、其性柔和なるが如し、凡そ三四種あるが如し。

「マゴツト」は久しき以前より知られたる者にして、古代希臘人は是を「ピセコス」と云へり、北亞非利加、殊にアルゼリア及モロッコに住む、往昔ストラボ氏及アリストートル氏も尙是を知れり、西曆百七十年の頃羅馬の一名醫ゲレーン氏は「人類の解剖」なる書を著はしたりしが、其時及爾後第十四世紀に至る迄人體の解剖は嚴禁せられ

有りて、ゲーレン氏は猿と人類との構造頗る肖似せる所より、是の猿の解剖を爲して以て人類の解剖書に充てたり、第十六世紀に至りて有名なる解剖學者アンドレアス・ベザリウス氏はゲーレン氏の解剖書を以て猿の解剖書なる事を漸く發見したり、此の猿は群を爲して森林に住み、土人の田圃に入りて其耕作せる野菜を奪掠す、其際二三疋の斥候高處に在りて敵の所在を偵察し、忽ち警戒を發して全群退却す、マゴットは歐洲即ちジブラルタルにも在り然れども其數極めて少なし、此のジブラルタルに在る者は亞非利加より輸入せる者の、逃れて野生と成れる者とする人多きも、或學者は是の事實を以て西班牙固有の動物なりとし、曾て亞非利加と西班牙とは地峽を以て連接したる事有るの證とす、他の種々の事實より見るも曾て西班牙と亞非利加と連接したる事有るは殆ど疑を容れざるが如し、「マゴット」は其顔に皺を有し、老體の如き顔なり、其幼なる者は柔和にして、人及家畜動物に馴る。

(未完)

内外彙報

一六

一般動物學

●最大最小の有脊椎動物 去夏官命により、第

七萬國動物學會へ參列の序を以て、各地の博物館を參觀した。その節紐育の大博物館に、丁度その頃出來上つた、鯨の自然大の模型を見た。一體鯨の如き大なる動物の大きさは、兎角誇大的に報道さるゝ傾きあるを以て、余は他日の參考にもと、この實測に基いて製つた模型の大きを記録して來たのである、この模型製作の監督は、兼てより鯨類の研究に於て、著名なる學者ルーカス博士によりて行はれ、氏が特にグリーンランドに赴きて、實測研究した資料に基づいたものである。

鯨種 Sulphur Bottom Whale: *Balenoptera musculus*.

Lim. (長須鯨の一種)

身長 フイット 七十六呎